

《舞姫》というタイトルのわけ

1 はじめに

私がこのテーマにしたのは、《舞姫》というタイトルに疑問をもったからだ。

《舞姫》という言葉は、本文中にほとんど出てこない。この話の中心であるエリスは舞姫であるが、エリスが舞姫だということが大きく内容に関わっているという印象も受けなかったのだ。

これから『舞姫＝豊太郎』という仮定で、職業としての『舞姫』と豊太郎の共通点、豊太郎の性格や境遇などを述べながら、論を進めていこうと思う。

私は、『舞姫』というタイトルは、『豊太郎』を指すと考える。

2 『舞姫』という職業と『豊太郎』

まず、はじめに、エリスの職業としての『舞姫』だが、本文では、エリスは、父が貧しく、十分な教育を受けることができなかったと述べられている。このため、エリスは、いい職に就くことができず、しかたなく舞姫という社会的に地位の低い職業に就いたと考える。また、舞姫とは、座長に、まるで奴隷のようにつながれて、こきつかわれる存在であると述べられている。

一方、豊太郎は、母や官長に言われるがまま、官長や母に都合のよい器械のような人間になるように生きてきた。また、本文には「足を縛られて放たれた鳥が、ほんのわずかの間、羽を動かして自由を得たと得意になっていたのではないか。この足の糸を解く方法はない。糸の先で、これを操っていたのは、我が某省の官長であり、今この糸は、天方伯の手の中にある。」とある。ここから、豊太郎は、ほんの少しの間、「エリスへの恋」という自由を得たと思っていたが、結局、自分は、官長らに操られて、官長らに従って生きていくしかないと思っていることが分かる。

このように、『舞姫』と『豊太郎』を比較すると、どちらも都合のよい「奴隷」や「器械」のように、ほかの人に縛られて、操られており、しかたなくそうやって生きていくしかないのである。

3 『豊太郎』の境遇 ～「踊らされた」豊太郎～

また、豊太郎は、決断力のなさや、意志が弱く無節操な心のせいで、周りの人さまざまな人に、自分の気持ちや行動を左右されて過ごしてきた。

友人の相沢には、「否」と言えない性格のために、深い考えもなく、エリスと別れると言ってしまったり、エリスを愛する気持ちがありながらも、天方大臣に誘われるがまま、結局、東京に帰ることになってしまったり、自分の意志ではなく、周りの人に自分の気持ちや行動を左右され、まるで周りの人に『踊らされる』ように、生きてきたのである。

4 まとめ

豊太郎は、まるで『舞姫』のように、上位の人に縛られ、操られ、周りの人に踊らされるように生き

てきた。

以上のことから、『舞姫』というタイトルは、『豊太郎』を指すと考ええる。

しかし、この『舞姫』の中で、豊太郎の人生を書くことで森鷗外が伝えたかったこととは何なのか。
それは、いまだに疑問である。